「食べられる景観（エディブル・ランドスケープ）を活用した プレイスメイキングによる予防的セーフティネットの構築」に関する研究

代表　木下　　勇　（千葉大学大学院園芸学研究科　教授）
委員　江口亜維子　（千葉大学大学院園芸学研究科　博士後期課程）

【研究報告要旨】

本研究は、以下の２点を目的とした実践研究である。（１）人々のコミュニケーションを促し、強いコミュニティ形成に寄与するとされる「食べられる景観」を沿道民地側のスペースを活用し、持ち運び可能なプランターを設置することで地先園芸的に展開する。（２）空き家を活用したコモンキッチンで収穫物を用いた共食活動を行うことで、コミュニケーションを促し、ゆるやかなつながりを生み出し、人間関係の網目をつくることで予防的セーフティネットの構築を図る。

地域との応答的関係で進めるＰ（計画）Ｄ（実践）Ｃ（評価）Ａ（見直し）のアクションリサーチの方法により、以下の点が明らかとなった。「コミュニティとのつながり」の観点から、①「食べられる景観」は、住民同士のみならず、見知らぬ通行人も含むコミュニケーションの機会を増幅させる。②「食べられる景観」により、地域内を歩く楽しみができた。③共食活動により、コミュニケーションの質が深まる。④お揃いのプランターで食べられる景観を展開することにより、地域愛着や帰属意識を育む効果がある。⑤既存の地域団体とつながることで、お互いに補完的に活動を進められる。⑥ゆるいつながりを持つことができる。「地域の食」の観点から、⑦新鮮で美味しい野菜が身近で育てられる。⑧ローカルビジネスに寄与する可能性が示唆される。⑨たねとりまでを行うことで、このエリアでの植物バンクへの実現、地域内循環の仕組みづくりの可能性が期待できる。「教育」という観点から、⑩園芸体験を通し、身の回りの自然環境を学ぶことができる。⑪食べられる景観での生態系づくり。⑫野菜の成長過程を観察することによる、食育への貢献。⑬アート作品への展開。

以上、住民の手で「食べられる景観」をつくり、「共食活動」を行うことにより、多様な価値を生み出しながら、人と人、人と場所にゆるやかなつながりを生み出す。その人間関係の多様な網目が、安心、安全に暮らすことのできる予防的セーフティネットとなる。